『浄土真宗の法事』

最近法事の意味が解らず、自分の知らない人の法事などは、しなくても良いと思う人が増えているようです。ここでは法事の意味を、大きく二つに分けて考えてみましょう。

一つは、亡き人を思い、自分自身のいのちの尊さを考えるご縁です。

私の一番大切なものは、自分のいのちでしょう。この世にたった一つの、一度のいのち、かけがえのないいのちです。これを「私のいのち」「自分のいのち」と思っていますが、このいのち、私は頭の先から足の先まで全部親を縁として授かったものです。自分で作ったものは一つもありません。そして生まれた時から親の願いや思いを受けて育てられたいのちです。その上両親がいただけではありません。その親がいてまたその親がいます。五代十代遡れば何千、何万といういのちの中に私が生まれさせていただいたのです。このいのちいただいたことに感謝し、喜びを見いだし、その願いに叶うような生き方をしなければなりません。与えられたいのちを精一杯生きる人生を歩まねばなりません。

次に法事とは法の事と書きます。私が仏法に出遇うことが法事です。そこでお釈迦様の説法である、お経を拝読するのですが、お経は漢文で書かれていて、それを棒読みするものですから意味も全く解りません。

それでお経拝読の後、そのこころを法話としていただきます。

江戸時代の話です。四国の高松在に、庄松さんというお念仏を喜ぶ人がいました。よくお寺参りをしたり、お寺のお手伝いをしていました。

庄松さんはいつも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…お経はありがたいな」と、口癖のようにつぶやいていました。それを聞いていたそのお寺のお坊さんは、からかい半分に「庄松さん、そんなにお経が有り難いなら、このお経を読んでみてくれ」とお経本を手渡しました。庄松さんは学校で学んだことなどありませんから、文字を書くどころか読むことも全くできません。さぞ困るだろうと、庄松さんを見ていると、お経本をいただくと「庄松おまえをたすける、弥陀にまかせよ、安心せよ」と書いてあると答えました。

長いお経も、突き詰めてみると、仏さまが、私たちを「必ず救う、我にまかせよ」と、喚びたもう「南無阿弥陀仏」に収まるのです。